

川下の風景⑱

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【明日という不確実性への希望】

モビールという北欧あたりの玩具がある。幼子はベッドの上で、糸にぶら下がった何頭かのクジラを眺める。空中に漂う一頭のクジラが、春の心地よい風でゆれれば、糸で繋がった他のクジラもゆれる。勢いがついて全体が大きくゆれれば、一頭のクジラは大波に飲まれるように大きくゆらぐ。私たちの暮らしとはそういうもので、事象も人の暮らしもどこかの誰かと繋がっている。“ゆれる”ことを問題とするなら、原因は心地よい風だから窓を閉めればいい。しかし、次は暑さをしのぐエアコンの風かも知れないし、動かないクジラに苦情を申し立てるように泣く幼子の大声かも知れない。つまり、“ゆれる”という不確実性について問題を論じたところで、それを回避して暮らしを営むことはできない。

一方、安定しているからこそ“安心”がある。天気予報のように、今日と同じ日常が繰り返されること。変わらぬ自分が明日も存在する、そんな根拠のない希望的観測があるから自己維持していける。人間の表皮細胞が毎日四千万個ずつ生まれ変わることを知っていれば、昨日の“私”は今日の“私”ではない。私たちの暮らしは“変化と安定”で構成される、という事実さえ知っていれば、眼の前の桜は去年の桜とは異なる。4月、環境が大きく変わり、不安に挫けそうになる人へ。大丈夫、明日は変えられるし、明日はおそらく同じようにやってくる。

【変わらないことを愉しむ】

春の夜長とは言わないが、ここ三ヶ月ほどルーティンにしていることがいくつかある。平日の週2～3回程度の夜ランニング。大した距離じゃない。僅か7キロ程度を40分程かけて走る。そうしておく週末の山行が随分楽になるし、できるだけ遠くに、高く登りたいと思えばこそ、スピードと体力を欲している。就寝時は落語をBGMにするようになった。興味がなかったが、話術の習得の為に聴いている。専門学校の教壇に立つようになって12年目になるが、勢いで語るには限界もある。落語は学ぶべき点が多い。呼吸で物語が変わる。少しずつでも本を読む。スマホをいじる時間があれば、本を読んでいる方がいい。月2冊を目標としているが、まあぼちぼちだ。ようやく村上春樹の長編が終わる。実用書と小説、これを行ったり来たり。アウトプットも欠かせない。人は言葉で物語を作る。意図的にその機会を作らないと身に付かない。4月から新たな講師生活が始まるので、毎年の資料を改変していく。同じ教材でも、インプットした分、必ず視方が変わる。どれだけ世の中が変わっても、変えない方が良いこともある。生成AIの技術がどれだけ進歩したとか、株価が乱高下しているとか、流行りのタレントがどうか。私のルーティンに影響を及ぼすことはない。どうせ5年も経たないうちに世の中はまた変わる。名作と古典落語と、悠久の山々は何も変わらない。変わらないことを愉しむ春だ。

【94歳の介護認定更新調査立ち合い】

ない。

介護2だが、下がってもサービス利用に支障は

ただ、それを支える妻も同じく高齢者だ。

評価としての認定が下がることは、良くなったという実感以上に、自分たちの暮らしが過小評価される心持ちになる。

調査と言うと張り切るお年頃だから、

「何でもかんでもできる、と言うちゃいかんよ」と老夫婦にアドバイスしておく。

案の定、94歳は役者だから、なかなか大袈裟な年寄りになってしまう。

「いや～立てへんわ。歩くのも困る」

しかし、調査が長くなるとあちこちで辻褄が合わなくなるし、余計に調査が長くなって、挙句の果てに、

「ちょっと、トイレへ」と歩いて行っちゃう。そこは、長年連れ添った老夫婦。阿吽の呼吸で妻が素早くリカバリー。誉められた光景じゃないけど、私は別に何も言わない。ちゃんと日常の暮らしがここにあるじゃないか。「介護の時間」で暮らしを計るとはこういうことだ。

【母、息子の親子喧嘩】

老健のレスパイトから帰宅すると、必ずこれが起こる。最早、イベントのようなものだ。そのたびに出向いて行って、親子の間に割って入って双方の話を聞いてやる。毎回、結論も変わらない。中長期の展望を述べてやる。それでまた、レスパイトに入って行かれる。こうして在宅生活は細々とやっている。

【家族が親の施設入居を決めた】

それを私に同意を求められても困る。更には、「これを本人に説明した方がよいか、どうか」で夫婦の意見は異なるらしい。認知症により短期記憶が著しく低下していくが、きちんと説明しておきたい嫁と、結局、そのプロセスに意味を見いだせない息子の意見の食い違い。

これも、家族の好きにされればよい。ただ、円満な合意というのは難しいだろう。翌日には忘れてしまうのだ。そもそも、生きている時間軸が異なる。家族の贖罪の為にやるのなら、やらない方がよい。姥捨て山に登る際、息子に負われた母は道中の枝を折った。帰り道、息子が道に迷わぬように、と。負われる老親の心持ちは誰にも分らない。

施設入所の段取りは全て家族にやってもらう。自分たちの親を預ける場所だ。見学から申請まで家族がやるべき作業だ。「いい人」病のケアマネはそれを代行しようとするが、それは家族の力を奪っている。行くも、戻るも、家族が決める責任と権利を持っている。それを奪ってはならない。

【不思議なもんだな】

毎年見てるのに、今年も心待ちにする。季節は私たちの心境や生活に変化をもたらす。引きこもってた人がふらっと陽気に誘われて外出してみたり。認知症のある方が、急に話し出してみたり。家族は「薬を変えたから」とか「これをやめてみたら」というキッカケを思い出して喋ってくれる。そんなこと、今までもやってきたし、すぐに状況はまた変わるかも知れない。思うに、春のせいだとも思う。

陽気が高まると、介護者の心境も変わる。介護者に余裕の隙間ができると、ちゃんとそれはクライアント本人に伝わる。それでも当人たちがキッカケを思っただけならそれでいい。

「そうか、よかったね」と聴いてあげるので良い。他に誰が言えるんだろう。

援助者の大きな役割でもある。

2025.8.25 米津達也